本館所蔵高麗版大蔵経懐旧

教授 若 槻 俊 秀
（中国哲学史）

今から30年程前になるが、中央公論社によって一連の大乗仏典シリーズが刊行された。その第６巻は浄土三部経であったが、大無量寿経の「三毒五悪段」の部分、及び観無量寿経は漢訳が現存するだけで、原典が出現していないことに鑑み、恩師である故大阪大学名誉教授の森三樹三郎先生が山口益先生の依嘱によって、その漢訳部分の訓読・口語訳・注解を担当された。その折りに大正新修大蔵経が底本としている高麗本との照合・確認作業を依頼されたことがある。今でこそ影印高麗蔵刊行により、公的機関のみならず個人所蔵によって容易に見得ることとなっているが、当時においては全国的にも七、八箇所にしか所蔵されていない貴重なものの一つであった本館所蔵の高麗本に直接触れることができることに、感動を覚えながら照合作業をしたことを、昨日のことの如く思い出すことである。（尚、「本館所蔵高麗版大蔵経―伝来と現状―」と題して平成２年３月16日発行『書香』第11号に梶浦晋氏の報告・紹介がなされていて詳しい。参照されたい。）

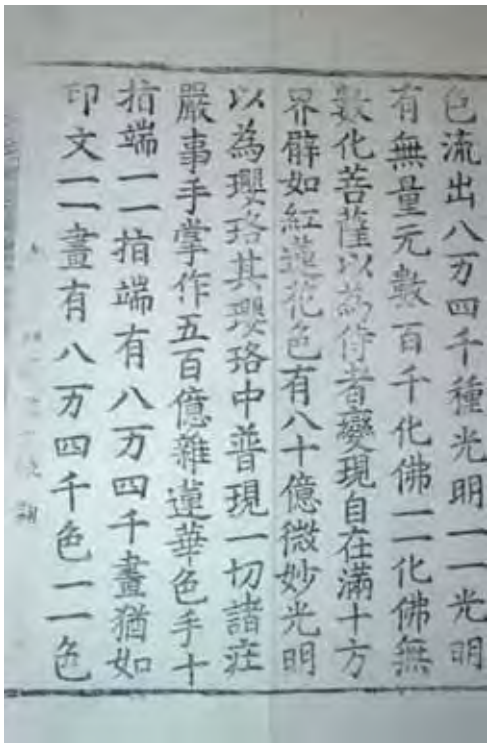
さて、その当時の森先生の手堅い訳注は、随所において創見が提示されている。今ここにその一つを取り挙げてみることにしたい。

観無量寿経科文でいうところの正宗分、定善十三観のうちの第十観、観音観の「譬（臂）如紅蓮華色、……」の部分。通行本では「譬」とあるのを高麗本では「臂」としているのを、従来から「臂」と麗本ではしているが、「譬」と音通であることから「譬」として把え、「譬えば、紅蓮華の色のごとし。」と訓んできている。それについての森先生の訓みは「譬（臂 ひじ）は紅蓮華の色の如く、八十億の光明有り、以て瓔珞と為す。……」であり、「その腕は紅の蓮華のような色をしていて、八十億の光明を放ち、その光明を身の玉飾りとしている。」と口語訳される。そしてその部分の注解では次のように述べられている。

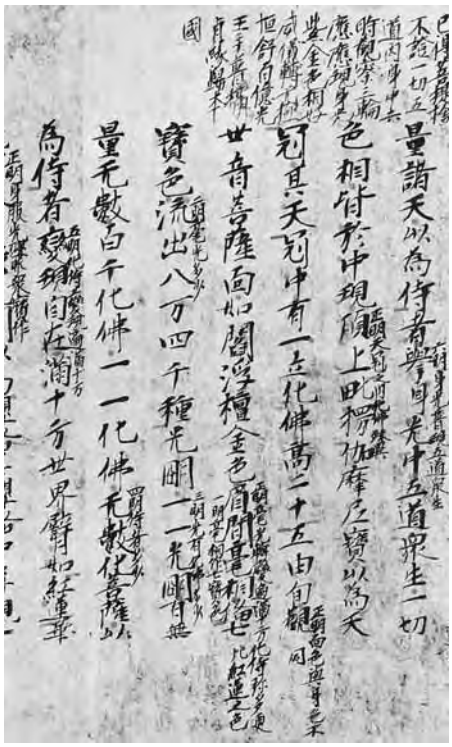
> 通行本では「譬」（たとえば）となっているが、これでは前後の文章の続きが悪くなる。ここは高麗本の「臂」に従うべきである。そうすれば、観世音の面、臂、手掌、足を順次に述べることになり、きわめて自然な文章になる。

この先生のご指摘は、従来の訓み方に是正を促すものであった。先生はその観無量寿経訳注の凡例で、

> 観無量寿経の和訳には、親鸞の加点本を延べ書きした『観無量寿経延書』（『親鸞聖人全集』所収）、および増上寺の大雲僧正の訓点本（大雲点）を延べ書きにしたものなどがあるが、今は必ずしもこれらによらず、もっぱら文字の訓詁に従って解釈した。底本としては通行本（浄土宗全書本）を用い、大谷大学高麗本によって校定した。高麗本は通行本に比して多く



高麗版大蔵経（部分）



親鸞自筆本（西本願寺蔵）
『親鸞聖人眞蹟集成』（法蔵館）

の長所をもつが、とくに通行本の文意の通じない箇所については、高麗本によって解釈し、これを和訳した。

とご自分の見解を述べられるように、その立場からまことに明解に従来の解釈を一新されておられるのである。

なおこの「譬」「臂」文字については、各大蔵経でいろいろ異なりがある。以下にそれを挙げると、宋、磧砂本、「臂」。房山石経、「譬」（隋唐刻経）、「臂」（遼金刻経）。高麗本、「臂」等である。また親鸞聖人真蹟本『観無量寿経註』中の該当箇所では「辟＋言＋月」を合体させた文字を筆写して「譬」と「臂」の二系統を見ていられたことが窺われ、興味深いが、『親鸞聖人全集』加点篇３所収の勝福寺所蔵書写本では「たとへば紅蓮華色のごとし。」とあって、聖人は「譬えば紅蓮華色の如し。」と訓んでおられたことがわかる。

以上、観経の一部の訓みについての森先生の理解を紹介し、改めての検討を今日において行う必要性を感じながら、本館所蔵高麗版大蔵経についての私の懐旧談を記した次第である。